

奈良大学図書館「北村信昭文庫」Ⅱ

北園克衛初期詩篇補遺ならびに北村宛諸氏書簡

浅* 田 隆

はじめに

この報告は、「奈良大学図書館「北村信昭文庫」——北園克衛初期詩篇及び初期未発表詩稿——」（奈良大学紀要）34号 平成18年3月 奈良大学総合研究所発行）に連続するもので「Ⅱ」とした。

ご遺族北村美椰子さんから預かった北村信昭氏の略年譜ならびに主要業績を以下に紹介する。

【略年譜】

本名 北村信昭 きたむらののぶあき 明治三十九年七月二八日〜平成一一年七月一九日

享年九二歳 本籍奈良市

大正 七年 三月 奈良県師範学校付属小学校卒業

一二年一〇月 奈良県立郡山中学三年中退

一 一月 家業写真業に従事

一四年 五月 大和日報社編集部勤務

昭和 二年 九月 同社退社 写真業に従事

一九年一〇月 奈良日日新聞社編集部整理部に勤務

二二年一〇月 同社退職 写真業に従事

三三年 八月 奈良県観光新聞社入社（平成元年八月終刊）

三五年 一月 京都・（株）前田進行堂印刷所入社

四〇年 八月 同社 退職

八月 大和タイムス社入社

五〇年一〇月 奈良新聞社（大和タイムス社改題）退職

【業績 等】

昭和 八年 「南洋パラオ諸島の民俗」（東洋民俗博物館刊）

一一年 八月 ミクロネシア群島に渡島、民俗探訪、動物の生態を観察

一二年 七月 沖繩に渡島

- 一五年 「科学南洋 別冊―パラオ鳥動物メモ―」(日本
学術研究会パラオ熱帯生物研究所発行)
- 一八年 共著(宮武正道)『パラオ鳥童話集 お月さまに
昇った話』(東京・国華堂日童社刊)
- 二九年 『エラケツ君の思い出』(ミクロネシア民俗会
刊)
- 五八年 『奈良いまは昔』(奈良新聞社刊)
- 六二年 『わが十九春詩集』(ミクロネシア民俗会刊)

故北村信昭氏のご遺族のご好意で、本学図書館に受け入れることが出来た氏の遺品・蔵書等について、平成一七年度奈良大学総合研究所研究助成を受け、学部生・院生(青木美奈子・山田恭子 以上修士一年、小西生恵・坂田実穂・平良枝里子・福森由理・古田周子・柳沢千夏・吉原香里 以上学部三年)の協力を得、整理した。そして北園克衛(橋本健吉)の初期の、主として奈良の地方紙『大和日報』掲載の詩、ならびに、北村信昭氏宛の橋本健吉書簡や詩稿を紹介したのが、先の「奈良大学図書館『北村信昭文庫』―北園克衛初期詩篇及び初期未発表詩稿―」である。その後の整理過程で北村文庫中の同人雑誌に掲載された北園の初期作品五篇を新たに見つけたので紹介する。

また、北村氏にはその青春時代、詩作とともに映画評なども執筆する時期があった。以来断続的に奈良地方紙にかかわり、新聞人として文学関係の動向を紹介すると共に「新しい村奈良県支部」の事務局を

担当するなど、奈良における文学や文化の動向を渦中で身近に体験した結果、晩年における氏の著述は、大正期以後の奈良の文学や文化の動向についての、貴重な証言となっている。

そのような北村氏の蔵書や遺品、さらに著述をいかに紹介し保存するか、奈良で近代文学に携わる者の責任として、整理の範囲と方法について手探りしつつ進めている。また整理完了後は、ご遺族のご好意に応える意味でも、一般の利用に供することが出来る形が望ましいと考えている。

今回は当初、「新しい村」関係の新聞記事の紹介ならびに「大和日報」の文学動向にかかわる記事、松村又一や野長瀬正夫の初期詩篇の紹介なども含めたかったが、紙幅が膨大となるため、北村氏宛書簡の紹介にとどめた。西條八十書簡三通、兵本善矩書簡一通、野長瀬正夫書簡一七通、松村又一書簡一八通である。ほかに尾崎一雄の正統『あの日この日』(講談社)の取材にかかわる書簡二二通その他もあるが、今回はポリウムとの関係で紹介できなかった。

西條八十は著名な詩人であるが、その少年期、明治四三年から一年間奈良市内で暮らした。書簡はそのことに関する内容。兵本善矩は奈良県五條市出身で、志賀直哉奈良在住時代に師事し「新潮」などに短篇を発表するなど彗星の如くに登場し注目されたが、生活破綻的要素の強い人格的要素もあって大をなすにはいたらなかった。野長瀬正夫は奈良県吉野郡十津川村出身の詩人。昭和四年上京、五十一年には詩集『小さな僕の家』を出し赤い鳥文学賞や野間児童文学賞を受賞して

いる。松村又一は高市郡明日香村出身の詩人、民謡作家。農業の傍ら詩作に励み、大正一四年詩集『野天に歌ふ』を刊行。農民詩人として出発し、のち関西詩人協会を主宰してもいる。また松村には『大和日報』に七回にわたって連載した「大和文壇今昔」があり、当代の奈良の文学状況を知る貴重な資料ではあるが、これも今回の紹介からは省かざるを得なかった。

紹介した書簡を見ると、かつて大正後期から昭和にかけての奈良における活発な詩壇の形成が想像される。

一、橋本健吉（北園克衛）初期詩篇補遺

1 都会の恋

「雲」 第二年第三輯 大正一三年二月一日

編集人松村又一 発行人藤原徳次郎

さても侘びしき

師走の午後の薄き日ざしに、

もろもろの

言葉を忘れ、

吾が思ひ

遠く君にかかれり。

されど 都の夕まぐれ、

しづかにむせぶ噴水の

さむき心に 現はれしは

ありし日

君がうなじを垂れ

吾が青き掌に握らせし

空色の細きてぶくろ。

吾が黒塗の馬車は

白きシルクの幕をとぢ

ひそかにきしりそむるより、

じつに

うれわしき心となり、

そを裏かへしなば

ありありと

指環の跡のこりたり。

そが てぶくろは

いつかしら失せてなけれど、

今年も師走と聞く日の

めぐり来たるより、

まこと

吾が心に現はれしは

ありし日

君がうなじをたれ

吾が青き掌に握らせし

2 虹色の数学

空色の細きてぶくろ

『関西詩人』 第一年二輯 大正一四年一〇月一日

編集人松村又一 発行人藤原徳次郎

調子の良い太さと長さの

白い紐で吊るされた、ガラス窓の精神は

プリズムの眼を働かせて

七色の独言をつぶやいてゐる。

内には

蒼ざめた哲学者と萎びた白い息子

細君はバスケットを嵌めて

市場へ黄色い尾を曳いて行つた。

見給え

庭の棕櫚が手を上げて

ばらばら届きさうな、齒掻い夕暮だ。

今こそ、私は、毛むじやらの鍵を頭蓋骨に差しこんで

都会の遠近に、科詩者と学人とを接合して

虹色の数学を案出した。

よしむば君が、リトマス試験紙で

黄昏の甘みな感触を証明しやうとしたり

ウエーベルの法則で、いかに夢遊病者の情熱を、理論づけやう

と焦らうとも

この阿片の恍惚と、燐の臭ひを持った答案を

覆へすことは出来ないだらう

答案第一

ある夏の真昼間

高層建築の屋上庭園で、遠心力の奇怪な圧迫のために、歪にな

つた彼と私との恋が

サイダーの瓶の口から洩れてくる

微妙なメロデーに強調されて

いかに不思議な暗号を交換したか。

下りのエレベーターの中で

ともすれば飛んで了ひさうな魂に

いかにたよりなくすがりついてゐたか。

やがて、私が、賑やかな十字巷で受取つた

鍼力製のコルセットと、鉛色のヘルメットが

いかに偶然的な必然であつたか。

それよりも、弾かれたやうに街角から飛び出して来た老嬢が

矢庭に、私のポケットに両手を突っこんで

いかに哀切な失恋のいきさつを話したか

いや、さうでもない。

その老嬢か、じつに典型的美人でなかつたために

私の気持を悪くしたと言ふ理由から

いかに無雑作に撲り倒して了つたか。

いや、さうでもない。

その老嬢の、蠱惑的な肉体が、アスファルトの舗道に打突かつ

た刹那

実にへなへなになつて、へばり付いて了つたその時

げらげら嘲つた奴が

まさしく自動車ハドソン号だ。

私の胸には、復讐の刃が沈んで行く。

答案第二

真夜中

机の上には、無数の空瓶が息づく。

飲み残したペーパーミンツの赤いレットルを剥ぎ取らぬ私の愛情

が

古ぼけた洋館の春を、斜に流す真夜中。

眉間の辺りへ亜鉛華をなすりつけ

秘そかに黒く覆面する。

見給へ

夜は緑と黒の闘争に汗ばんでゐる。

冷たく汗ばんでゐる。

今だ、鋼鉄の踵が、まつしぐらに電線の上をすべつて行き。

陸橋のあたりに揺れてゐるのは

女の心臓と、蒼白い瞑想の鏡。

私は鋭い指を尖らせて

あの心臓の中心へ

ユークリッド幾何学の墓碑銘を綴る使命がある。

さうして、多血質な時計機会は

永遠に憂鬱を懐胎させる、理想のスクリーンだ。

もはや、敏捷な犯人の夢には

確乎とした鋭角の真理と

静かな、静かな、並木がある。

(答案第三以下、次輯)

【注】右末尾のとおり「次輯」とあるが、以後の「関西詩人」には橋本健吉の作品は掲載されていない。

3 少年異語

「関西詩人」 第二年第四輯（終刊号） 大正一四年九月一日

編輯兼発行人 北村信昭

松村又一兄による

蛇

東前草・藪草・藜藿・茅花の類ひが一面に繁つてゐる草原の中を、するとすると、するすると進みゆく蛇のつややけき皮膚と、静かなる方向と更に見よ、彼の惱ましき瞳の色を。真昼の光りあまねき草原の真直中を（あいつはきのう畔の陰影から、赤い口を開いて嗤つてゐたが）青白い腹を覗かせながら、するすると滑つてゆく。

人 形

その小さな唇には、玉虫色の口紅をなすつてやり花びらのやうな類は、水白粉ですつきりとお化粧をしてやり。淋しい眼には（きらきらと輝くやうに）ガラス玉を容れやう。真赤な美しい着物もさうして草色の広い帯もしめて、この広い十畳の部屋で、静かな静かな遊びをしやう、しづしづとその薄暗い部屋を歩るき廻り、ああさうして、不思議な遊戯に耽りながら、秘密な秘密な話をするには、何んと私にふさはしい、想つたゞけでもけらけらと笑ひたく成るではないか。

風 景

目覚むれば薔薇色の雲霧たり。この丘の風は昨日の如く匂はしく、毛髪の長きがままに冷きに似て重からず。既に高く空高く飛び過ぐる啼鳥あり左に遠く蛙声の頻りなれば、白い巻煙草に火を点じて、紫の良き味ひや、起伏する森と丘とかくも清清し

き空気と、あまことに、故里の山川ならで、吾が心の故里にや、木の香さへ消ゆるに未だきに底の色を懐かしみて、はるばる想ふ事だになく、静かに坐して机に向へば、古人の言葉の、しみじみと親しまれて、さて溺ることなく、興くれば詩を草し、即ちつくれば草原に出でて草と戯れ、緑よき葉を唇にしては、彼方の丘をたづね行けども、更に歌はず。沈黙として風景の広きがまに驚くことなく。颯然と来たり颯然と去る偶士の言に動ずるなく、また何んぞ去日涕涙の因をただして、肅條たる思人の眉を懐しまむや。

太子堂の草庵にて

〔付記〕松村又一は編集後記に以下のように記している。

本輯には紙面の都合で野長瀬正夫君の詩を割愛した。橋本君の「ゲンペゾルテの饗宴」といふ詩は僕の計画中の雑誌のために頂いて置く。

4 友に与ふる詩

〔抒情文芸〕 第二輯 大正一五年三月一日

発行編輯兼印刷者 松村又一

「俺は恋人まで

試験管に入れてしまつたよ」

さう言つて

からからと笑つた友よ

ぢや 私も

少し淋しいけれど

からからといつしよに笑ほう。

蒼ずんで行く夕暮の寂寞や

しんかんとした真夜中

静かな瞑想の影に顕現するものは

あの朝熊山や

ささやかな小川の

せせらぎでもあつたのか

この頃

帰郷のことについて迷つてゐる

君の気持も

よく分かるやうな気がする。

凄じいまで厳肅な真理の探求者

友よ

しかし あの

あからんだ不思議な発作の牙が

すぐれた靈魂の核心に伸びてゆく事実

それはどうすることも出来ない

宿命ではないだらうか

5

断 髪

—モダンガールにおくる—

『浅茅』 第一巻六号 昭和七年十月五日

編集発行者吉川清太郎

ザキン・・・・と切られた

その斬新な分量と感触

軽快な散歩と

涼しい食欲

諸君↑・・・↓諸君

すくなくともこの非人間的

この機械的可憐さを讀へやう

それならばいさぎよく放して遣りたい

さうして 若しか

意外な出来事のために

その宿命から遁れることが出来たならば

私はどんなに嬉しいだらう。

【付記】『抒情文芸』第三輯（大正一五年五月一日）掲載の「前

号詩壇合評」に「友に与ふる詩」についての「透明な憂

愁」「恋人を試験管に入れるだけの激しい疑惑を持ちな

がら彼のふるさとの山や川のせ、らぎをなつかしむ人生

であつたか、それにしてもこの人は言葉の整理をする必

要があらう」との評言が見える。

それから揮発する

エキゾチックな空想と連想と

総て——

それから放射する鋭角的な動行への示唆を讀へやう。

香水 ↓ 鉦

脚 ↑ レース

車輪 ↓ ドア

電車 ↓ ストア

靴 ↑ 靴

銀座の街路で

百貨店の屋上庭園で

アンテナの先端で

詩人・画家・俳優・会社員・記者・ドロボウ・撒水夫・巡査・

探偵・理髪師・ボーイ・私の頭骸骨の内側で

1・3・5・9・7・0

B・P・A・R・Z・X

アスファルトの舗道

電気 ↑ 電気

電気 ↓ 電気

空 ↓ ラヂオ

時計 ↓ カップフェ

香水 ↑ 香水

実に ↑

貴婦人の断髪が—シヨップ・ガールの断髪が

ひら——

——ひら

ひらひらと施転する。

【注記】作品に続けて以下の付記がある。

橋本健吉の詩について

手紙を整理してゐたら橋本健吉の未発表の原稿が出てきた。大和日報文芸欄を北村が編輯してゐた時代に、彼が僕に送つて来たものだ。もう五六年或ひは六七年前のことだから今頃発表するのも随分変なものだが現在「詩と詩論」改称して「文学」や、「今日の文学」や其他の芸術派的分野でシユールレアリスムの詩やエッセイを書いたり、又今年の二科に当選して相当有名になつてゐる北園克衛＝橋本健吉への挨拶に代へる。僕達を全く忘れて了ひまたその詩をも忘れてしまつてゐるであらう彼は確かに面食ふだらう。(吉田龍太郎)

二、北村信昭宛諸氏書簡

1 西條八十書簡

A 絵葉書(おらんだ万才) 奈良市八条町六 奈良観光新聞社

付 北村信昭様 日付四月九日 消印千歳 39・4・11 後0

—6 東京世田谷成城町 西條八十

いつも奈良観光を御恵与下さいまして感謝いたしをります四月十日

号にわたくしの記事をかいて下さってよくお忘れなくとうれしくおもひました。私も旧臘から約四個月病臥し、やつと回復しました。元氣なうちにあの古市町の宮隅氏を訪ねたいと思ひました。

徒事^{とろ}芒々、妻に死なれてから家事に忙殺され、仕事の半分も出来ず、
□□□□や世を憐^{あは}れなんです。この初夏あたりあなたにお目にかかりに行きたいこち切です

B 葉書（文献等受贈謝礼文印刷） 奈良市東包永町七〇 北村信

昭様 日付一月二十六日夕 消印千歳

42・1・27 後0—6 東京世田谷成城町 西條八十

「奈良県観光」一五七号

右御惠贈下さいまして まことに有り難く御芳情に対し篤くお礼申上
ます

とりあへず拝受の御挨拶まで

〔添え書き〕

いつも頂いて恐縮してをります、今年は古市町の宮隅君に会いそびれてしまいました、今度参る際は大兄にもお目にかかりたく念じています

C 絵葉書（伊豆国立公園） 奈良県奈良郡山市北郡山町 奈良県

観光新聞社 北村信昭様 日付4年12月12日 消印千歳 44・

12・13 後0—6 東京都世田谷区成城町三〇 西條八十

頂いた新聞の御筆のあとを辿り、「やつぱり奈良は僕の居たところがいちばんよかつたのだなあ」とおもひました コンクリートの市役所ですか（？）出来てからまだいつておません 古いものがほろびてゆくのはかなしいことです なつかしい□□モチイドの赤い灯が目にしみた若い日

2 兵本善矩書簡

封書 B5白紙用紙 奈良市猿沢池畔 北村信昭様 日付十

一月十二日 消印差出局不詳 2・11・12 広島市上柳町二番

地 野中政藏方 兵本善矩

お端書を有難う。

九里さんご一族 奮戦のおしらせ、甚だ興味深く、拝読しました。

君は、社をやめて、お家のご商売をお励みの由、私は何もわからない乍ら、何だかその方がかへつて 君が 落ちつかれはしないかと一寸

そんな気持がします。もとく大和日報と云ふ新聞はそんなに大した

ものでもないのしやうから、そのために 君の将来がどうかうと云ふ程のこともありますまい。

まあ お元氣にお暮らしなさることを祈ります。人にさう云ひ乍ら、

私はどうも この頃災難つゞきで 弱りこんでいるのですが。

広島もさて やつて来てみると、思はしい家がなか／＼ 借りられないくて 困りました。二三日前移つたこの家は や、マシですが この

間うち十日ばかりゐたところは 実に 騒々しい イヤな場所だった

ので、頑固な不眠症になつて了つて、一層 頭も身体も疲れました。毎日、時間をつぶすのに 大へん骨が折れます、魚釣りでもやるつもりで きましたが、それも手近なところには 適当な場所もなし、話し相手はないし、閉口してゐます、

コーヒーのいゝ店を一軒みつけては 日課のやうにして電車に 乗つて 出かけたります。(たゞし、艶種 なんかは 付随せず。)

小説を書かうと云ふ 気持も この頃は影をひそめ、心細い話です。

田中清一といふ人、水の 美しい 川岸に高い洋館を建て、おさまつてゐます。

四度訪ねて、四度とも留守で、その上門番が随分 不愉快な奴で、滅多にお逢いなさるまい、と云つて いつ帰る、と云ふことを どうしても云はないのです。私も、まだ 何程の者でもないことを 痛切に省みさせられて 一寸 寂しくなりました。

広島は、暖かで、妙にのどかです。

静かで、埃のない 遊び場所があれば、いゝかと方々歩いてみるのですが、みつかりません。奈良の紅葉は、もうポツ／＼美しくなり初めましたつてね。

宮島見物にでも 一度やつてこられてはいかゞですか。私はまだ行きませんが、海の社は明るく、珍しからうと思ひます。

たいくつまぎれに、この間、映画鑑賞会と云ふものをのぞいてみましたが、世に、広島は活動写真ほど面白くないものも 一寸 少いだ

らうと 呆れました。

藤原義江氏の 演奏会を 先々週かに 高師の講堂へ 聴きに行きました。

奈良へも行つたかもしれませんが、相当よかつたやうです。シユールベルトの子守唄なんか、君がきいたら、非常によろこびさうなものでしたよ。

今の広島には、鈴木三重吉氏の描いたやうな、空気は 殆んどどこにも、見出されません。ガツカリしました。

広島は女の人は、皆、大抵、一ト通りきれいです。そしてズバ抜けた 美人も居ないのが 特徴のやうです。 ひどく玄人染みた言草かもしれませんが。

昨日、ストリンドベルクの 一幕物を集めた訳本を買つてきて こそ読みはじめました。私もすこし厭ウツひになつた方が眼のためによからうと思ひます。

では又、

兵本善矩

北村信昭様

十一月十二日

3 野長瀬正夫書簡

A 封書 奈良市猿沢池畔 北村信昭様 日付四月九日 消印差出

局不詳 21(？)・4・9 吉野郡十津川村小原 野長瀬正夫

啓上、御無沙汰のお詫びをぬきにして一筆いたします、貴兄が奈良日々へお勤めの由承り、吾等青春老いたりとも雖も君もやはりペンを捨てずにお勤めかと、回旧の情を禁じ得ませんでした、小生、昨年四月に東京を引上げ、山深くこもつて居ります、久しく詩作も絶つて居りましたが終戦後、山で孤独と欠乏の生活の中で世相の非情と対決するに及んで、自分の内部には美と愛と真を求望するもの次第に昂まり、再び詩を書きはじめました、「あの一」と題する終戦後の作品集を、近く京都の大翠書院から出版します、四篇の連作から成る「あの一」は、先月B Kから放送したのですが、ご存知なかつた事と思ひます、来月早々奈良へ参る予定なので一度お目にかかりたく存じます、東京の出版関係から再三上京を促され、それでは三月中旬に上京するからと、一応承諾したのですが、こちらの事情も見るに忍びないものがあるので村内七区五十五部落の男女青年に呼びかけて、青年連盟を組織して文化運動に着手してゐます、何しろ十津川村と云ふところは、一種の頑固な封建の城ですから、私の仕事は青年たちに先づ文化とはどう云ふことであるかを説き、彼らが正しくものを考へ、判断し、批判する力を育成して、将来の理想郷を作らんものと、講演に歩いてゐます、そんなことに追はれて、上京もできず、引受けてゐる原稿の仕事も、仲々捗らず、自縄自縛の形です、新潟市へ昨年から妻子を預けてあるので、今月十六日、七日頃から子供の顔を見に新潟へ行き、東京・京都・奈良を経て帰郷の予定なので、(五月早々)その時、あなたに

も久しぶりでお目にかかり度く思つております、

此頃、あなたが新聞社にゐると云ふ、噂をきいたので昔なつかしく、近況報告がてら一書を呈上する次第です。

四月九日

野長瀬正夫

北村学兄

B 葉書 奈良市紀寺町一丁目34〜309 北村信昭様 日付五月四日

日 消印下谷 75・5・6 12―18 東京都豊島区南大塚三の

一九の五 野長瀬正夫(住所印)

よい季節になりました。御無沙汰ばかりしておりますが、お元気で過ごして下さうね。先日、尾崎一雄氏の「あの日この日」を読んでいたら、あなたが、兵本さんの死をつきとめるまでの話が出ていたので、急になつかしくなりました。私も、あの日この日などを思い出してね。旧友たちと、ゆっくり交歓する折もなく、私の一生も終わりにそうになってきました。せめてもう一度くらいはお訪ねしたいと思つております。どうか、あなたもお元気で――。

C 葉書 奈良市紀寺町一の三四の三〇九 北村信昭様 日付六月

十三日 消印下谷 75・6・13 12―18 住所印同前 野長瀬

正夫

啓上、うとうとういい季節に入りましたが、お元気のことと存じます。

かくべつ珍しいというものでもありませんが、東京のもの少々、お届けするよう頼んでおきました。四、五日先のことになると（届くのは）思いますが、ご試食ください。先日社用で尾崎一雄氏を訪ねてきました、三十一、二年ぶりでしたが、なかなかお元気そうでした。それでは、あなたもどうかお大事に——。

D 葉書 奈良市東紀寺町一丁目三四—三〇九 北村信昭様 日付

六月二十九日 消印豊島 75・6・29 12—18 住所印同前

野長瀬正夫

啓上、「大和百年の歩み」を御恵送くださいます、ありがとうございます。ました。うれしいけれど、これではエビで鯛を釣ったような結果になつてしまい、申し訳ない気持ちで一杯です。しかし、せっかくの御好意ですから、今回はありがたく頂だいすることに致します。ほんとうにすみませんでした。とりあえずお礼まで。

E 葉書 奈良市東紀寺町一丁目34—309 北村信昭様 日付四月二

十二日 消印豊島 76・4・22 18—24住所印同前 野長瀬正

夫

前略、先日は「月刊奈良」を御恵送下さつてありがとうございます。対談、なつかしく、面白く拝見しましたが、お礼を申しおくれすすみませんでした。実は五月になつてから公表されることになつてい

るのですが、私の「小さな僕の家」は、五十年目に出た好運のホームランみたいなものになつて、この夏の間、十五万部位は出るだろうと予想されるようになりました。只今増刷中です。そんな訳で、私も来年あたりから厚生年金というカスミのようなものを食らいながら半仙人の暮らしに入るつもりでしたが、印税のおかげであと一、二年位は人間界にとどまることになるやもしれません。では、いずれ又。

F 葉書 奈良市東紀寺町一丁目三四—三〇九 北村信昭様 日付六

月二十三日 消印下谷 78・6・23 12—18 住所印同前 野

長瀬正夫

啓上、今年は春からずっと、うつとうしい日がつづきましたが、お褒わりなくお過ごしのことと存じます。先にお送りしました私の少年詩集は、青少年読書感想文コンタールの課題図書に選ばれて、すでに十五万部増刷されましたが、さらに今回、「赤い鳥文学賞」を受賞することになりました。今年は少々ツキがまわってきた感じです。八月早々、法事のため帰郷の子定なので、お目にかかりたいと思っております。吉田さんに、よろしくお伝えのほどを——。

G 封書 奈良市東紀寺町一丁目三四—三〇九 北村信昭様 日付

六月二十四日 消印下谷 日付不詳 受信記録51・6・26 住

所印同前 野長瀬正夫

前略 以心伝心とでもいうのでしょうか。実は昨日、会社であなたあ

ての葉書をかいて出してから、帰宅してみると、あなたから新聞が届いていました。うれしかったです。どうもありがとうございます。さて、その葉書ですが、東紀寺町の東をぬかして出したような気がします。戻ってくるかもしれませんので、改めて、ここに一筆します。

私の少年詩集「小さなぼくの家」は、三月早々に初版が発売されたのですが、四月になって、青少年読書感想文コンクールの、小学生の部の「課題図書」に選定されたので、すぐ十五万部増刷しました。詩集としては例のない大部数かと思えます。(十七、八万部は出るんじゃないかという予想ですが、これはあくまでも予想ですから、確実なことはまだわかりません。) そんな訳で、私としては全く幸運なホームランになったという次第。それに、おまげが一つ。今年度の「赤い鳥文学賞」を受賞することになりました。七月一日に、授賞式があります。七十年めで、今年は私にも少々ツキがまわってきたような感じになりました。

さて、この夏は、郷里で法事(十津川は神道なので、法事のことを「マツリ」といいますが)があるので、帰郷します。何日ぐらい休暇をとれるか、まだわかりませんが、奈良で一夕、あなたや吉田さんと、食事でも共にしたいと思っております。こう年をとってからは、かけ足旅行はシンドイので、一日でも多く休みをとりたいものと、工作しているところですが、なかなか手を放せない仕事がありましてね、うまくいきますかどうか。それに暑い盛りになるので、体の方もどの程度むりがきくか、ちよつと心配ですけれど。

それでは、お目にかかれる日を楽しみにしております。吉田さんに、よろしくお伝え下さるよう、お願い致します。

六月二十四日

野長瀬正夫

北村信昭様

H 葉書 奈良市東紀寺町一丁目三四—三〇九 北村信昭様 日付

八月二十九日 消印豊島78・8・29 12—18 住所印同前 野

長瀬正夫

前略、きびしい夏でしたが、お変わりなくお過ごしのこととぞんじます。小生こと、九月三日、御地へ参りますので四日の五時ごろ、ご都合よろしかったら、吉田、岸田さんたちと一緒に、歓談しながら夕食でも共にしたいと思っております。いずれ三日の夕方ごろでも、改めて電話をいたします。持ち時間が少なくなってきたので、こんな機会になるべくお目にかかりたいと思っております。

I 葉書 奈良市東紀寺町一丁目34—309 北村信昭様 日付十月十

六日 消印豊島 79・10・16 18—24 住所印同前 野長瀬正

夫

前略、ご無沙汰しております。古都の秋も深まりつつあることと思いますが、お変わりございませんか。小生こと、かねて友人の画家との約束があつて、十津川村役場小会議室で

阿貴良一・十津川スケッチ画

野長瀬正夫・詩と書の色紙 展覧会

(十一月二十三日～二十五日)

を開くため、帰郷します。拙著詩集「小さな愛のうた」が、今年度の日本児童文芸家協会賞を受賞することになりました。授賞式が十一月十五日なので、それがすんでから帰郷の予定です。

J 葉書 奈良市東紀寺町一丁目34ノ309 北村信昭様 日付十二月

十一日 消印豊島 79・12・11 8―12 住所印同前 野長瀬

正夫

先日ぐうぜんお目にかかれたのは、神さまのひきあわせかと、思ったりしております。お互いに持ち時間の少なくなつた身ですから、あなたとちょっとでも会えたことは望外のよろこびでした。あれから吉田家を訪ねましたが、吉田夫人も夫君のあとを追って三か月後に亡くなつたことを初めて知りました。(たぶん北村さんもご存じないでしょう、と家人が言っておりました)が、つくりなごさつたんでしょうね。

申し遅れましたが「奈良県観光」をありがたく拝受。あなたの博覧強記と、資料を大切に保存されているのには、びっくりしました。来年は一度ゆっくりお目にかかつて、奈良詩人や大和山脈時代のことを聞きたいと思っております。私は何も記録していませんし、資料も持っていないので、いずれまた拝眉の折を楽しみにしております。

ます。

K 葉書 奈良市東紀寺町一丁目34ノ309 北村信昭様 日付九月二

十四日 消印本所 80・9・25 12―18 東京都墨田区業平一

ノ13ノ5―四〇二 野長瀬正夫

前略、奈良新聞を御恵送下さつてありがとうございました。国原謙を拝見、いつもお心にかけて頂き恐縮にたえません。七十すぎでの引越はシンドイので渋々でしたが、ここはかなり広くて日当たりもよいので、住み心地は上々の方です。私の「ついでに住み家」になりそうです。十月末か十一月早々に帰郷して、あなたともう一度、食事でもしながら雑談したいと思っております。私は白内障で視力がおとろえ、読み書きがひどく不自由になってきました。手術をすすめられているのですが、それがイヤなので、これ以上進行防止の引きのばし作戦をやっているとろです。ヘタな字が右上がりになったのも、数年前から右目がダメに(右眼では、新聞の見出しの活字もよめません)なっていたせいかと思えます。あなたもどうかお大事に。

L 葉書 奈良市東紀寺町一丁目34ノ309 北村信昭様 日付四月十

日 消印本所 81・4・10 12―18 住所印東京都墨田区業平

一丁目一三―五 トータス業平ビル四〇二 野長瀬正夫

おたよりと新聞、ありがたく拝受しました。いつもPRして頂き、とてもありがたく、うれしく思っております。こんどの詩集はなかなか

好評らしく、七日に週刊朝日から取材に来ました。老人問題をふくんでいるので興味をもったのだらうと思います。早ければ十五、六日ごろに出るのではないかと思います。どんなことが書かれているかわかりませんけれどね。意外と早く再版になりそうです。私はコンタクトをはめて、やつと読み書きができるようになりました。あなたもお元気がいいのでうれいす。今年はお会いしたいと思っております。

M 葉書 奈良市東紀寺町一丁目三四〇九 北村信昭様 日付

四月三十日 消印本所 56・4・30 18―24 住所印同前 野

長瀬正夫

奈良新聞をお送り下さって、ありがとうございます。十津川の村長選挙のようすもよくわかって、重宝しました。ちょっと都合がわるくて、池田君の詩碑の除幕式には参列できませんでした。二十八日(四月)久しぶりに松村又一氏を訪問してきました。なかなか元気で、つい最近、歌謡詩をたくさん書いたそうです。これからそれを売り込むつもりだ、と言っていました。私もコンタクトをはめて、やつと読み書きができるようになったので、先輩を見習って、もうひとふんばりしてみようと思っております。「夕日の老人ブルース」は好評で、相当売れているようです。

N 葉書 奈良市東紀寺町一丁目34―309 北村信昭様 日付九月五

日 消印本所 81・9・5 12―18 住所印同前 野長瀬正夫

先日は久しぶりにお目にかかり、楽しいひとときを過ごすことができました。あれから私は京都に向かい六時五分発のひかり号で、十時ごろ帰宅しました。十一月初旬に、また西下しますので、今年はまだ一度、お目にかかれるだらうと思います。十津川には行かず、京阪神の旧友たちと交歓したいと思っております。奈良県観光の貴文を拝見、黄エイさんも、日中友好関係の強化で日陰の身から浮上したのだらうと思います。長いあいだ軟禁状態だったらしい、という説にも信じよう性があるような気がしてなりません。

O 葉書 奈良市東紀寺町一丁目34―309 北村信昭様 日付九月十

二日 消印本所 81・9・14 8―12 住所印同前 野長瀬正

夫

奈良新聞の切抜きをお送り下さって、ありがとうございます。あれは学芸通信社から頼まれた原稿で、信濃毎日、中国新聞などに出たという話は聞いていましたが、奈良新聞に出ようとは思っていませんでした。あの記事で二、三部は詩集の注文がはいるようです。センチネルの小さな出版社ですからね。私もついひと役買って、それとなくセンチデンに勤めているという次第です。来月あたり第三版が出そうな気配ですが、さてどうなるか。十一月にまたお目にかかれるのを楽しみにしております。どうかお元気でいて下さい。

P 葉書 奈良市東紀寺町一丁目三四一三〇九 北村信昭様 日付

十月二十三日 消印本所 81・10・23 8—12 住所印同前

野長瀬正夫

先日は、あなたにおめにかかり、楽しいひとときを過ごせたことを、喜んでおります。あの翌日、帰郷したのですが、雑用山積で落ちつかない毎日なので、奈良新聞も頂だいたまま、お礼を申し遅れてしまいました。おゆるしください。明二十四日と二十八日、講演の約束あり、それがすむまでそわそわした気分、どうもいけません。頼まれますと、つい断りきれなくて、自分で首をしめるような結果になり、閉口です。

Q 葉書 奈良市東紀寺町一丁目34ノ309 北村信昭様 日付五七・

一・二三 消印本所 82・1・24 12—18 住所印同前 野長

瀬正夫

速達のお手紙、ありがたく拝受。体調回復されてきた由、私も喜んでおります。私は相変わらず目で苦勞しております。春になったら左眼を手術して、もう一度奈良に行つて、あなたとお会いしたく思つております。黄エイさんには一両日中に返事を書くつもりです。彼も日本が懐しくてたまらないのでしょうか。私など、親しいというほどの間柄ではなかったのですが、すでに故人となつた人も多いので、生き残りの私のことを思い出すのかも知れません。では、いづれまた――

4 松村又一書簡

A 封書 奈良市東包永町七〇 北村信昭様 消印杉並 34・7・

16 10—12 東京都杉並区高円寺三ノ二九 松村又一(住所

印)

北村君

写真をさがしてみました。写真ギライの僕のこと故、ありません。ここに一枚素人写真がありますので、これでも使つて下さい。それから、僕の職業はただ「詩人」ということになっておいて下さい。作詞家なんて僕は大きらいなので。

とりあえず右まで。

B 昭和五四年年賀葉書 奈良市東紀寺町1—34—309 北村信昭様

賀正

昭和五十四年元旦

いつものことながら

新しい年がきて想うのは

生きていけると言うことの素晴らしさです

おたがいに若い気で頑張りましょうね

〒166 東京都杉並区高円寺南二ノ十八

松村又一

〔添え書き〕

おたがい元気なうちに、せめて旧友だけで一度集まりたいと思いま
す、四、五月頃、そちらに出かけます

C 封書 奈良市紀寺町1-34-309 北村信昭様 消印杉並南 日

付不詳 受信記録54・1・18 東京都杉並区高円寺南二ノ十八

—十七 松村又一（住所印）

北村君

先日はお電話ありがとうございます。丁度、不在でしたので、家内が電話をき
いてお話を伺ったのですが、

吉田徳蔵さんがお亡くなりになった由、何とも言えない寂しさと悲
しさに胸一杯になりました。

丁度年賀状に、この春には、みんな奈良に集って旧友だけの一席
を設けたい・・・と、書き添えたのですが・・・それもこれ
もみんな取り返しのつかぬことになりました。まさか、僕よりづつて
若い徳蔵さんが先にお亡くなりになるなんて、考がえてもいなかっ
ただけにショックも大きく、ただ、ためいきをつくばかり。でも、せめ
て残った者だけでも、一度、顔合せをしたいものだと思います。

今、奈良新聞を拝見しました。奈良の新聞なんて、東京にいてはな
かく見られないので、とてもなつかしく拝見しました。そういうば
西川林之助君も一昨年亡くなったそうです。何の通知もなかったの
で、年賀はがきあげたのですが。みんなバタ／＼と死んでゆくので、

びつくりしています。それにしても、遺族の人、通知ぐらくれたら
・・・と思うのですが、関西の人って、その点、無神経ですね。北
村君や西本君は別ですね。北村君や西本君は別ですが・・・藤原君の
ときも、新聞を見て驚いて、おくやみを申上げたのですが。

それから、「奈良観光新聞」毎月御寄贈下さって申訳ありません。い
つも貰^{もら}っぱなしにしている、三枝さんよろしくおつたえ下さい。何
か書かせて貰いたいと思っても、奈良時代の小生は、ただ百姓をし
て、詩をかいて、奈良の詩友と逢うだけの時間しか無かったので、奈
良の文化については何も知らないのです。

この頃、家内がその方面に興味をもち、いろ／＼昔の（飛鳥朝や奈
良朝）大和時代に関する本を集めたり、写真集を買ったりしているの
で、時には、僕もそれらの本をよんだりしていますが、何しろ、僕は
雑学の方で、ほんとうの大和文化については、あまり知らないの
です。でも、観光新聞の仕事は立派ですね。

まア、せめて生命あつて、健康なうちに一度、帰郷して、みなさん
と旧交をあたためたいと思います。まだ寒いので、四月か五月頃に一
度 帰りたいと考えてをります。それでは、今日はこれで。いずれ拝
眉の上、草々。

松村又一

D 葉書 奈良市東紀寺町1-34-309 北村信昭様 消印杉並南
80・11・13 12-18 住所印同前 松村又一
啓、いつもごぶさがちにて申訳ありません。

観光新聞も、奈良新聞も頂いていながら、実は、この六月以来病氣にて、近くの病院に入院していたのですが、ヤブ医者に、い、かげんにされて、いよく病状悪化したので九月中旬から十月一杯、第一国立病院新宿医療センターに入院してやっと退院してきたところです。そんなわけで、ほんとうに失礼していました。本当は大した病氣でもなかったのですが、病気をバカにして、そのうち全快するだろうと、タカをくくっていたのが、こんな結果になったのです。でも、もう大丈夫ですから御安心下さい。野長瀬君にも、今日ハガキかいたところです。

E 封書 奈良市東紀寺町1-34-309 北村信昭様 消印杉並南
日付不詳 受信記録83・9・24 住所印同前 松村又一
北村様

「月刊奈良」ありがとうございました。なか／＼、雑誌ですね。小生のこと、いろ／＼研究してくださる若い人のいることは嬉しいかぎりです。感謝^{ママ}しております。

お便りによりますと、あなたも七十七才になられたとか。何もかも夢のようです。小生は、まだ青年のつもりですが、八十五才になり、う、そ、みたいな事実なので、すべて驚きです。小生も、ここ数年病氣つ

づきですが、野長瀬君も、めっきり弱くなり、心細い話です。一昨年より、大和に帰る用事が沢山あったのですが、実現不可能でしたが、この十月中旬には家内と同道で、最後のふるさと訪問に帰る準備をしています。奈良では多分、三笠ホテルに泊るつもりです。そのときは、あなたや、西本喜一さん、それから、栗田さん、寺島さんたちにも、お目にかかりたいと思つてをります。

平野千史夫君のこと、あの放送（露営の歌）のとき、びょうちゅうでしたので、一寸勤ちがいをしていました。あれは、コロンピヤと、毎日新聞社の共同募集の歌でした。それと、キングの募集した「出征兵士を送る歌」と、ゴツチャにしてみました。話を途中で、やめました。あれには大変な問題があり、藪内（平野）が、十年ぶり、小宅にやってきて、困っているの、懸賞金を、もう一度、貰うように話してくれというので、（あつかましい話）、私も困ったが、あまりたのむので、交渉してやり、□□中、新橋ホテルの一室を、コロンピヤから提供して貰い、再度、当時の金で二千元、貰つてやったのですが、金を、ポケットに入れお礼も言わず「一寸トイレへ」と言つたきり、逃げてしまい、小生の顔は丸つぶれ、文芸部の人は怒るやらで、大変でしたが、話はまだ／＼つづくのですが、くわしいことはお目にかかつて。大和人の面よごしです。大変な男ですよ。県庁の土木課の給仕上りで、私の詩友の「上田一郎や酒井君」の下にいた少年でしたが。こんな話を全部したら、大変なので、もと私の弟子であつたというところで、NHKのあの話は、中止にしたのです。懸賞

金の話以外、いろ／＼あるのです。

今、思い出しても、あなたの祖母であるおばアちゃんに、いろ／＼お世話かけたこと、家内共々、感謝しながら、思い出しては、あの当時のことを話し合っています。

まだ病氣中で、寝ながら書いたので、字のへ、コイ、ガン、ダ点、御判読下さい。

松村又一

F 葉書 奈良市東紀寺町^ア2―34―309 北村信昭様 消印83・11・

30 12―18 住所印同前 松村又一

啓、この秋は、おそが^アしい事でしたね。もうホットした気持になられたことと思いますが、どうか御自愛下さい。私も久しぶりに先日赤坂まで出かけてきました。95%回復したようです。

栗田さんが、私みたいな片々たる詩人を、昔にさかのぼって、研究して下さるご好意に心から感謝しています。よろしくおつた下さい。私からも手紙さしあげるつもりです。私の別の一面を表現した第十詩集「流砂」さしあげるつもりです。あなたには十何年前にさしあげたと思いますが。ではまた。

G 封書 奈良市東紀寺町一―三四―三〇九 北村信昭様 消印

62・□・10 東京、杉並、高円寺南二―十八―十七 松村又一

北村信昭様

すっかりご無沙汰していますが、お元気の様子、何よりと存じます。

さて、本日は「奈良観光」沢山、お送り下すつてどうもありがとうございます。あまり沢山の部数があるので何事が起きたかと思つてびっくりいたしました。小生の一枚のはがきから、あれだけの文章を、まとめあげるあなたの記憶力のすばらしさに、私の方が驚いています。

いつの間に、こんな年になったのかと、驚いています。まだ／＼若い気持でいるのに、年齢だけが勝手に歩いてゆくような、そんな気持です。

今度は小生の長男の畝夫が老青年向の新聞を出すことになり、小生も駄文をかいています。出来上がったら、さっそくおとどけます。「老青年に乾盃」というのが、小生の駄文で、大いに景気のいい、ことを書いて万年青年ぶりを發揮しています。きっと、苦笑されるかも。何しろ昨年三月から女房が病氣入院。まだもう少し先の、三月頃には退院するでしょうが、そんな訳で、高円寺の家には私一人。そんな訳で、殆んど外食ですが、近くの珈琲館には毎日、二時―三時半まで、そこらの新人類やギャル族らと共にコーヒーをのみ、煙草をふかし、そして食事をして、老青年は私一人かと思えば、そうでもなく、同じような人物が、何人かいて、たのしくやっています。

もう、詩壇があるのか無いのか、詩人はいることはいはるのですが、マスコミの軽薄な奴に無視されて、大正時代の詩の盛んだったことが夢みたいです。

時代と共に、人間族は益々軽薄になり、金さえあれば人間の魂まで買えると思っているのが、一番しゃくです。

まあ世界の片すみで、いくら私がかんばつても、どうにもなりません。んが。

今年になってから、小説を書き始めました。「俺もこれ位のものは書けるんだぞ」の意気を示したく。

時代は千四百前後。「入鹿の首」というのが題名で、三〇%史実、七〇%は空想の人物の活躍、三〇〇枚の予定ですが、約七〇パーセントまでこぎつけました。自分でやってみて、小説家は重労働だとわかりました。歌謡詩のように原稿紙一枚なんて、今まで楽を、しすぎたと、□□しています。

今日はこれで。いづれ近日中に、老青年向の新聞、送ります。

松村又一

三枝社長様によくお礼申し上げて下さい。

H 封書 奈良市東紀寺町一―三四―三〇九 北村信昭様 消印杉

並南 62・6・23 東京都杉並区高円寺南二ノ十八―十七 松

村又一（住所印）

北村様

先日来のいろいろな御配慮ありがとうございました。辛い私は、珍しく、このところ元氣ハツラツ。何も彼も一人でやっていますので、御安心下さい。

さて、詩集の序文、書くには書きましたが、これで、よろしかったらお使い下さい。ダメなら捨てて下さってもいいのです。

東京にいる奈良の詩人は私一人になりました。西谷さん死に、植村諦、野長瀬と、亡くなり、広い東京は詩のない砂漠です。私は、アラビア人みたいな気持で、この大都会を、さまよっています。でも、ただくやる仕事一杯で、かんとんに死ねません。

一応仕事片づけば、奈良へ出かけます。ふるさととは冷たいが、でも、何人が友達がいいますので。とりいそぎ、これで失礼。

又一

〔同封「序文」原稿〕

序に代えて

松村又一

北村君が、詩集を出すので、私に序文を書けという。今更私が・・・と思つたが、せひたのむというので、ともかく書くことにしました。

現在の北村君は、奈良市での名士でもあり、物識り博士でもあるが、詩の方は六十何年間も前の作品で、ぶつたりと詩作を断っているので十八九才頃の作品群であろうか。

純真無垢、北村君ほどこの言葉に、ぴつたりの人は珍らしい。それは八十才に近い現在に於てもそのナイーブな、美しい彼の魂にいささかの変化もない。濃厚で、物柔らかな、沁々と人の心を、うるほすあの人は、どこから来たのだろうか。彼の書くその詩もまた、あえかに

美しい。

「べにさし指の星」という彼の詩は、初期の作品かと思うが、この美しいファンタジイに充ちた星たち……、これを私流に書けば「あゝ、涙ぐましいまでに美しい星たち」と、いうことになるだろう。人さし指を見つめて、そこから生れくる彼の詩的幻想は見事に的を射ていて「涙ぐましい」までの美しい星となり、やがて初恋の人となり、夢となり、そして儚く消えてゆく……こういう美しい抒情詩には、批評は無用。その美しい詩の旋律に、思わずためいきが出る。

「唐人笛」という詩ほど、私に、物がなしい、わびしさと、想い出を呼び、私を少年期に引き戻して郷愁をおぼえさせる。詩というより、この詩には物悲しい音楽が……。パア、テレレレレ、ペロペラ……とひびく。

このパア、テレレレレ、ペロペロは、きく人によつて、それ／＼異なるイメージを与え、いつきいても心の飢えをおぼえる。殊に、終戦後の、物資のなかつた時代は、あの笛の音をきいて、私達は、涙を流し、物の飢えと、心の飢えを同時に感じたものであつた。

しかし、最近では、あの物悲しい「唐人笛」はきけなくなつた。カッブ、ヌードルなんか出来たせいだろう。物資にめぐまれて、人々の眼と心は、ただ、金、金、金の亡者になり下がつた。私たちが明治人間は、一体どこへゆくのだ——と、歎きたくなる。

あゝ、世も末かと歎けば、いや、まだ／＼この世は悪くなると、誰

かが言う。

このへんで、ペンを止めないと、私の脱線ぐせが、又顔を出すので、これで終わりといたしますが、もう一度、北村君の、あの頃の詩はあえかにも美しかった。今、よみかえして、私の臉は、いつの間にか、ぬれていた。つい先日六十何年間、苦勞を共にした、わが愛する妻、君代を失くしたからかもしれないが……。

六十二年六月二十一日夜

**A supplement of "Introduction of Katue Kitazono's early stage"
& A letter addressed to Mr. Nobuaki Kitamura.**

Takashi Asada